

四旬節 復活に向かって

イズコ 神父

時計は止まらない。次の3月5日から四旬節に入り、4月の16日からキリストの復活のお祝いが始まります。四旬節とは何か。もう一度この質問に答えなければ……。そうですね、復活への道、キリストの復活を祝うために準備の時、五週間の準備……。毎年同じ！同じ？違うよ！何故かと言うと、世界はいつも同じではない、あなたも去年とは同じではない……。だから、今年の四旬節は違う機会、新しい恵ではないでしょうか。

この恵みの時が無駄にならないように、毎年ローマの教皇様はメッセージを送って下さいます。機会があれば、全部ゆっくり読んで下さい。長いメッセージではないですが、ここではそれをまとめて一番大事な箇所を伝えたいと思います。

教皇様は、ルカによる福音書の一つのたとえ話を選んで（ルカ16・19～31）、話されます。「金持ちとラザロ」のたとえ話です。たとえ話によると、ラザロと言う人は、できものだらけの貧しい人で、金持ちの食卓から落ちるもので腹を満たしたいと思っていましたが、金持ちにとってラザロの存在は眼に入らない、彼のことは見たくもない、でも昔も今もそのような貧しい人はいます。そのような人にも名前も、顔もあります。神にとってはご自分の子です。愛されている神の子……。そして、私たちにとって、宝物です。回心に導く招きです。心を開くと、毎日でもこのような人、私の愛を待っている人に会うことが出来ます。そのような人達は私からの尊敬、愛、助けを待っています。目を開いてみましょう。

金持ちの姿も描かれています。「いつもの紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日遊び暮らしていた。」この金持ちには名前がない。けれどその心はよく現れています。お金への愛着や虚栄に満ちた心。「金銭への欲は全ての悪の根源です。」とパウロが書いています。（1テモテ6・10）。それは互いに助け合う道具となるのではなく、私たちを縛り、愛と、平和から私たちを離れさせてしまいます。このたとえ話によれば、その金持ちの心は欲張りによってむなしくなっていました。見せかけの心しかありません。中は空っぽです。お金への愛着によって、盲目になって、目の前にいる貧しい人が見えなくなっているのです。

やがて、二人は死んで、貧しい人は天国に連れて行かれました。金持ちは生きている間に祈ることをしなかったが死んでからアブラハムに向かって父よと呼びながら一生懸命に祈りますが、その祈りは聞き入れられませんでした。金持ちはこの時、始めてラザロに目をとめ、助けを願いますが、又アブラハムが応えます。「今日、思い出してみるがよい。おまえは生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今はここで彼は慰められ、おまえはもだえ苦しむのだ……」。

この金持ちの失敗はどこから来るのでしょうか。「おまえ達には神の言葉がいる。耳を傾けなさい。」（16・29）金持ちは神を愛していなかった、神の言葉を聞こうとしなかったし、隣の人を軽蔑しながら生きたのでしょう。神に心に向ける人は、隣の人にも心に向ける

でしょう。

四旬節です！ちょうどキリストにもう一度会うのに適当なとき、又隣人に出会うのに適当なとき。回心の道を歩むとき、私の助けを必要としている人に仕えるとき。教皇様のメッセージの最後の言葉で「キリストの勝利を分かち合いながら、互いに祈り、苦しんでいる人、貧しい人に扉を開けながら、復活の喜びを完全に分かち合うことができますように」。